

近世イタリア諸都市におけるキリスト教徒とユダヤ人の関係性

著者	藤内 哲也
別言語のタイトル	Relations between Christians and Jews in Early Modern Italian Cities
URL	http://hdl.handle.net/10232/14766

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720272

研究課題名（和文） 近世イタリア諸都市におけるキリスト教徒とユダヤ人の関係性

研究課題名（英文） Relations between Christians and Jews in Early Modern Italian Cities

研究代表者：藤内 哲也（TONAI Testuya）

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：60363602

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世ヴェネツィアにおけるゲットーの成立と拡大の過程について検討し、金融業者を中心とするユダヤ人を集住させるための装置として成立したゲットーが、16世紀中葉以降の拡大によって、ユダヤ商人の定着を促す特権としての性格を帯びていったことを明らかにした。また、ゲットーで暮らすユダヤ人がキリスト教徒の都市民と完全に隔絶されていたわけではなく、むしろ日常的に多様な関係を取り結んでいたことについても考察した。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the process of the establishment and the subsequent expansions of the Venetian Ghetto. It showed that while the ghetto was made for compulsory concentration of the Jews, it functioned as a sort of privilege for the Jewish merchants seeking their own residence as it was enlarged from the mid 16th century. Jewish inhabitants in the ghetto were not completely segregated from the Christian people in the city, interacting with them on many different ways in daily life.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：近世イタリア史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ユダヤ人、ゲットー、レオン・モデナ、イタリア、ヴェネツィア、アシケナジム、セファルディム

1. 研究開始当初の背景

本研究の当初の目的は、ヴェネツィアをはじめとする近世イタリア諸都市において、キリスト教徒の都市民とマイノリティとしてのユダヤ人がどのような関係を取り結んでいたのかを考察するために、各都市によるユダヤ人政策の展開過程や、キリスト教徒とユダヤ人の交流や摩擦の諸相について検討することであった。それは、近世イタリア諸都市、とりわけヴェネツィアにおいて、ユダヤ人が経済的に重要な役割を果たすとともに、その存在が都市社会に多様な影響を与えていることが指摘されながらも、それぞれ豊富な成果が蓄積されているイタリア都市史研究とユダヤ史研究の成果が必ずしも有機的に接合されず、また差別され、排除されるマイノリティとしてのステレオタイプ化されたユダヤ人像が広く普及しているために、キリスト教徒の都市民や旅行者とユダヤ人との間で結ばれたさまざまな関係について、具体的にはあまり提示されていなかったからである。

しかしながら、中世地中海商業で繁栄し、ヨーロッパ経済において重要な地位を確立していたヴェネツィアに代表されるイタリア諸都市が、近世初頭の経済的、政治的な変動に対応できずに次第に凋落していくなかで、ユダヤ商人の経済力に着目して、むしろ積極的に都市内に誘致して経済の活性化を図る一方、宗教改革の進展にともなう宗派間の不寛容な潮流から、ローマ教皇庁の指示や圧力によって、金融業者を中心とするユダヤ人をゲットーに隔離していくことは、ユダヤ人の追放が一般化したフランスやドイツと異なるイタリアの大きな特徴であった。したがって、イタリア諸都市のユダヤ人政策や、日常生活におけるユダヤ人の活動の実態を明らかにすることは、単にユダヤ人のおかれていた状況を解明するだけでなく、中世やルネサンス期に比べて研究が手薄な近世イタリア都市社会の諸相を理解するうえで、きわめて重要な意味を持つはずである。

こうした見通しのうえにたって、本研究では、研究代表者がこれまで取り組んできた近世ヴェネツィアの政治社会史研究を基盤としつつ、マイノリティとしてのユダヤ人の居住の場であるゲットーの成立と展開の過程や、そこででの日常生活を通じて形成されるキリスト教徒との関係性を描き出すことが計画された。

2. 研究の目的

近世イタリア諸都市におけるキリスト教徒とユダヤ人の関係性について考察するために、本研究では具体的に以下の2つの課題を設定した。

①イタリア諸都市におけるゲットーの成立と展開

②キリスト教徒とユダヤ人の交流や摩擦

近世イタリア諸都市のユダヤ人政策においては、ゲットーの成立と普及が大きな特徴となっている。ユダヤ人共同体やその代表者に与えられる特許状によって認められたゲットーへの居住は、キリスト教徒の市民によって構成される都市政府とユダヤ人との間で結ばれた公的、政治的な関係性を端的に表すものである。しかも、ゲットーの成立事情やその後の展開過程は、各都市の政治的、経済的、社会的な諸条件に規定されており、そこにそれぞれの都市社会が有する特徴を見出すことが可能となるはずである。上記課題①は、こうした点について具体的に考察することを目的としている。

一方、ゲットーがユダヤ人を都市社会の内部に定住させるための装置である以上、ユダヤ人の金融業者や商人とその顧客、ユダヤ人医師と患者、ユダヤ知識人とキリスト教の聖職者や知識人との間では、日常的な接触や交流があり、それを通じてさまざまな関係性が構築されていたことは容易に推測される。しかしながら、都市政府とユダヤ人との公的な関係性をみるだけでは、キリスト教徒の都市民や旅行者とゲットーに暮らすユダヤ人の日常的な関係性を必ずしも明らかにできるわけではない。そこで、両者の多様な人間関係を具体的に解明するために、上記課題②が設定された。

3. 研究の方法

本研究では、具体的な研究課題①「イタリア諸都市におけるゲットーの成立と展開」について、研究代表者が従来から研究対象としてきたために先行研究や史料の多くが入手済みであるヴェネツィアを中心に検討することとした。しかもヴェネツィアは、対抗宗教改革にともなうローマでのゲットー設置に先駆けて、16世紀初頭にゲットーを創設していることから、ゲットー成立が都市固有の事情によるものであることは明らかである。そもそも、強制的なユダヤ人居住区を示す「ゲットー」という用語自体がヴェネツィアに由来するものであり、ここで創設された強制的なユダヤ人居住区が16世紀半ば以降にイタリア各地で設置されるゲットーのモデルとなったことから、ヴェネツィアのゲットーの成立と拡大の過程や背景について詳細に検討することで、都市社会におけるゲットーの位置づけや機能が明らかになることが期待される。

一方、課題②「キリスト教徒とユダヤ人の

交流や摩擦」については、キリスト教徒やユダヤ人の自伝や日記、あるいはヴェネツィアやイタリア各地を訪れた旅行者の観察などを史料として、ゲットーでの日常生活におけるキリスト教徒との接触、宗教的、文化的な交流、あるいは都市支配層との政治的、社会的な関係性など、重層的で可変的な結びつきのあり方を明らかにしていくことを目指した。とくに、16世紀末から17世紀前半にかけてヴェネツィアのゲットーで活躍したユダヤ知識人のレオン・モデナの自伝について詳細に検討することで、キリスト教の聖職者や都市支配層、旅行者との交流の様子や、両者の間に築かれた人間関係の性質について看取できるはずである。

4. 研究成果

本研究において設定した課題①「イタリア諸都市におけるゲットーの成立と展開」に関して、まず都市支配層におけるユダヤ人やゲットーに関する認識を確認するために、ゲットー創設にいたる都市議会での「議論」の内容や性格について、ヴェネツィア貴族M・サヌートの日記を史料として検討した。その成果は、口頭発表ののち論文「ヴェネツィア貴族と「議論」—16世紀におけるゲットーとユダヤ人をめぐる事例から—」としてまとめ、公表した。

またイタリア半島で最初に強制的なユダヤ人居住区を成立させ、「ゲットー」の名称の起源となったヴェネツィアのゲットーの成立とその後の2度わたる拡大の過程や背景について、都市議会が公布したゲットー関連法令や先行研究などに基いて検討した。その結果、都市市民の金融需要を満たすためにユダヤ人を都市に定着させ、その経済力を利用したい都市政府と、聖職者や都市市民の間に広がる反ユダヤ感情の妥協の産物として成立したゲットーが、地中海商業活性化のために誘致をはかっていたユダヤ商人側からの要求に応じる形で拡大されたことにより、一種の特権としての性格を持つようになったことが確認された。さらに、排除の対象としてのアシケナジムのユダヤ人と、誘致の対象としてのセファルディアムのユダヤ商人が同じゲットーを共有して、混住している点に、ヴェネツィアのゲットーの特殊性を見出すことができた。これらの成果は、論文「ヴェネツィアにおけるゲットーの創設」および「近世ヴェネツィアにおけるゲットーの拡大」にまとめ、公表した。

次に、課題②「キリスト教徒とユダヤ人の関係性」について、17世紀前半に活躍したユダヤ知識人レオン・モデナの自伝を史料として検討した。その結果、ゲットーではキリスト教の聖職者や都市支配層、あるいはヴェネツィアを訪れる外国人旅行者などがユダヤ

人と宗教的、文化的な交流を行っていたこと、また都市支配層との間には恩顧や保護を期待しうるパトロネージ関係も成立していたこと、しかしながらそのような関係は、なんらかの契機によって都市市民の反ユダヤ感情が高まった時期には、無力化や破綻の危険性をはらむ不安定なものであったことなどを確認することができた。これらの成果は、学会等における口頭発表を行った後、その一部を論文「近世ヴェネツィアのユダヤ知識人とキリスト教徒」として公表した。

さらに、都市社会におけるマイノリティとしてのユダヤ人は、ゲットーという隔離的な居住区に押し込められる一方、都市外に広がる広範なネットワークのうえで盛んに移動する流動性の高い集団でもあった。こうした点をふまえ、ヴェネツィアにおける同じマイノリティとしてのムスリム商人や黒人奴隷などとの比較を通して、ユダヤ人の置かれた状況にみられる特徴を明らかにし、共編著『クロスボーダーの地域学』における都市社会でのマイノリティ論に反映させた。

一方、本研究の主たる対象となったヴェネツィアをはじめ、ボローニャ、パルマ、モデナ、レッジョ・エミーリヤといったポー川流域の諸都市や、ユダヤ商人の誘致に成功し、ヴェネツィアと対抗しうる港湾都市となったアンコーナにおいて現地調査を実施した。そこでは、主として旧ゲットー地区の範囲や旧市街地での立地条件、シナゴグやユダヤ人関連施設と、大聖堂や恵座活動の中心地区との位置関係などについて可能な限り確認し、資料収集も行った。

なお本研究において当初予定されていたローマやフィレンツェといった中北部イタリアの大都市については、先行研究等の収集には着手したものの、現地調査は実現せず、ユダヤ人政策やゲットーに関する比較史的な観点からの具体的な検討には至らなかった。そのため、調査範囲を縮小し、確実に成果を得られるヴェネツィアについての考察を優先して実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①藤内哲也「近世ヴェネツィアにおけるゲットーの拡大」『鹿大史学』査読無、59号、2012年、pp. 43-54
- ②藤内哲也「16世紀ヴェネツィアにおけるゲットーの創設」『鹿大史学』査読無、58号、2011年、pp. 55-66
- ③藤内哲也「近世ヴェネツィアのユダヤ知識人とキリスト教徒」『創文』査読無、536号、

2010年、pp. 6-9

④藤内哲也「ヴェネツィア貴族と「議論」—16世紀におけるゲットーとユダヤ人をめぐる事例から—」『関学西洋史論集』査読無、33号、2010年、pp. 11-18

〔学会発表〕(計4件)

①藤内哲也「近世ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人」第31回歴史社会研究会(島根大学)、2011年12月27日

②藤内哲也「ヴェネツィア貴族と「議論」—16世紀初頭におけるゲットーとユダヤ人をめぐって—」関学西洋史研究会第12回大会(関西学院大学)、2009年11月15日

③藤内哲也「近世ヴェネツィアのゲットーにおけるユダヤ知識人の人的結合関係—ラビL・モデナの『自伝』から—」京都大学西洋史読書会第77回大会(京都大学)、2009年11月3日

④藤内哲也「近世ヴェネツィアにおけるユダヤ人とキリスト教徒—レオン・モデナの『自伝』から—」イタリア中・近世史研究会(富山大学)、2009年8月9日

〔図書〕(計1件)

竹内勝徳・藤内哲也・西村明編『クロスボーダーの地域学』南方新社、2011年、252頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤内 哲也 (TONAI TETSUYA)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：60363602